

“絵画資料に見る中世の職人”

【問い合わせ先】市文化財課 ☎ 31-0625

中世の時代は、武士が武力によって地方を支配し、公権力に仕える時代ですが、一方、民衆もたくましく生きた時代でもありました。

芸能や産業が発展し、様々な職種が生まれ、手工業において特化した職人も多く現れるようになりました。

そうした職人の姿は、『職人歌合絵巻』(様々な職人が左右に分かれ、それぞれの職人の職種に応じた内容の歌を詠み、判者が判定を下すという歌合の型式をもつもの)をはじめとする中世の絵画資料に描かれています。

また、中世前期から後期にかけて職種が大きく増える中で、交易ネットワークの発達に伴い、全国の市や湊町など交通の要所で商人とともに活動していました。

歌合絵巻では、番匠(大工)・鍛冶(鉄素材や製品を作る)・塗土(ぬり物師)・櫓物師(曲輪作り)・かはらけつくり(土師器作り)・瓦焼・鋳物師(鋳型からの製品作り)・石切(石工)・結桶師(桶作り)などの職名が見られます。

七尾城跡や三宅御土居跡、港湾遺跡などの益田氏関連遺跡群から出土する土師器や陶磁器類

のほか、鉄製品や瓦、曲物、桶、石鍋なども、国内外の職人や地元の人によって作られたものです。

特に、益田家文書に記載されている「大中洲鍛冶名」との強い関連性が考えられる中須西原・東原遺跡では、数多くの鍛冶関連遺構が発見され、鍛冶職人の集団の存在が推定されます。

中世の益田では、七尾城下町や、中須西原・東原遺跡などの湊町などで、多種多様な職人や商人が大勢活動し、経済的な繁栄を支えていました。

